

プロ野球における地域密着に関する研究 A study on Japanese professional baseball from a view point of Community Attachment

1K06B219-5

本木秀明

指導教員 主査 作野誠一先生

副査 宮内孝知先生

【緒言】

1936年、日本プロ野球が発足した。プロ野球は誰からも愛されるスポーツとなり、“国民的スポーツ”となっていた。しかし、2000年代になると、プロ野球の人気低迷が浮き彫りになっていった。多くのプロ野球のスター選手は、アメリカへと渡っていった。そして、かつてドル箱と言われていた巨人戦の視聴率は低迷していき、2004年には近鉄バッファローズとオリックスブルーウェーブの球団合併問題をきっかけに選手による史上初のストライキも発生した。これまでの日本のプロ野球の歴史は、読売ジャイアンツを中心に回ってきたといってもおかしくない。それは、プロ野球のコミッショナーが“お飾り”状態になってしまっていること、巨人戦の放映権収入に依存するプロ野球球団が多かったからである。そして、プロ野球界には、問題が起きなければ、問題解決に動かないという風潮が見受けられる。現状のままでは、プロ野球の人気回復の兆しは見えないと筆者は考えた。これが、本研究を行うに至った背景である。そして地域密着の経営を分析し、プロ野球の人気復活の方法を明らかにすると共に提言をすべく、本研究を行うことにした。

【研究方法】

第1章ではプロ野球界における諸問題について分析し、第2章では国内における地域密着、第3章では海外の地域密着について調べた。第2章では、地域密着を球団の創設理念の一つに掲げた東北楽天イーグルスについて調べた。まず、楽天球団誕生のきっかけとなり、プロ野球の分岐点にもなったストライキについて触れ、東北楽天イーグルス設立の経緯までを調べた。そして、創設1年目から多くの活動を行い黒字という結果を収めた経営について分析を行った。そして、独立リーグの四国アイランドリーグでプレー経験のある益田陽介氏にインタビューを行う。四国アイランドリーグは、プロ野球と比べると規模が圧倒的に小さいリーグではあるが、地域貢献を掲げて活動をしていることから、有意義な話が聞けると思われる。独立リーグの存在は、プロ野球を目指す本格的な環境であり、野球界の底辺拡大へもつながってい

く。選手という立場から、地域貢献に対して、どのようなアプローチをしたかをたずねた。

また、第3章ではメジャーリーグについて取り上げた。メジャーリーグは、スポーツビジネスの本場であるアメリカ合衆国のプロスポーツであり、日本プロ野球が見習うべき点があると考えられた。そして、メジャーリーグ全球団でチーム名の頭には必ず地域名が入っており、地域に根差した経営を行っていると考えられる。また、球団移転も多く行われているため、地域密着を行う考えを持っていることが考えられた。

【結果と考察】

本研究における分析を通じて、地域密着がこれからのプロ野球には重要なキーワードになってくると考えた。楽天球団の経営結果が黒字となった背景に地域密着が大きく関わっていた。そして、四国アイランドリーグも初年度は、地元でも低い知名度であったが、選手や球団スタッフの地道な活動の甲斐があり、2年目以降の観客動員数の増加につながった。メジャーリーグでも、地域密着が欠かせないものとなっていて、地域に根差すことができなかった球団は、移転を繰り返すという思い切った経営も行っているのであった。それだけ地域密着が大事であると考えられる。そして、メジャーリーグでは、「共存」が存在していることがわかった。収入再分配制度やぜいたく税の導入など、戦力均衡がリーグの繁栄につながるという考えのもとに、メジャーリーグのコミッショナーが動いている。本研究から、これからの日本プロ野球には地域密着とプロ野球界全体での共存が大事になってくると感じた。筆者が考える「共存」とは、球団同士、そしてプロ野球全体とファンとの共存のことである。共存という点から、一つの球団が地域に根差すということだけでなく、プロ野球が地域に愛されることが必要と考える。これからの人気繁栄のためには特定球団のファンを増やすだけでなく、まずはプロ野球ファンを増やすことが必要になってくる。プロ野球は、ファンの存在なくして成り立たない。プロ野球と地域との共存も必要と考える。しかし、現在プロ野球は、四国アイランドリーグのように組織全体で地域密着を掲げていない。リーグ全体が、共存を考え地域密着を現実のものとするための、改革が必要と考える。